

説教『神の建てた都を待ち望む』

小河信一 牧師

ヘブライ人への手紙 11章1節～16節

「1 信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。2 昔の人たちは、この信仰のゆえに神に認められました」という言葉で始まるヘブライ人への手紙 11 章の〈信仰者列伝〉の中に、モーセが登場します(11:23-29)。

申命記 34:1-8 を手がかりに、「望んでいる事柄を確信」していたという〈信仰者〉の一人、モーセの姿を見てみましょう。

申命記 34 章は、いわゆるモーセ五書の最終箇所ですから、形式上は、ハッピーエンドが予想されま
す。果たして、旧約の巻頭、モーセ五書の聖書通読が、めでたしめでたし、という形で終わるのか、確
認しましょう。

申命記 34:1-3 モーセの死――

1 モーセはモアブの平野からネボ山、すなわちエリコの向かいにあるピスガの山頂に登った。主はモーセに、すべての土地が見渡せるようにされた。ギレアドからダンまで、2 ナフタリの全土、エフライムとマナセの領土、西の海に至るユダの全土、3 ネゲブおよびなつめやしの茂る町エリコの谷からツォアルまでである。

細かいことを言うようですが、実際、地理的には、ネボ山、ピスガの山頂(現在のヨルダン領。現在それと推定される山の高さは 800m)から、「西の海に至るユダの全土」は見えないと思います。ユダの山並み(標高およそ 600m~1000m)にさえぎられて、地中海側、ユダの西部分は見えません。そこに、私が旅をして山頂に立ったわけではありませんので、これはあくまでも推測ですが……(旧約学者、フォン ラートも同じ見方をしています)。

では、モーセが見渡している土地に冠して「すべて・全」が3回使われているのは、なぜでしょうか？

それは、主なる神がモーセに、乳と蜜の流れるカナン的全地を明らかにして、神の約束の全体像を見せたということではないでしょうか。

それ故に、その時、ピスガの高嶺(たかね)に上ったモーセには、肉の眼ではなく、「見えないものを見通す」霊の眼が与えられていたと言えるでしょう。モーセは、まさに「見えない事実を確認」した、そこに神の恵みが満ちあふれている真実を確証したのです。

この人生最期の絶頂を成す霊的な登山のために、「モーセは死んだとき百二十歳であったが、目にはかすまず、活力もうせてはいなかった」(申命記 34:7)のです。モーセは思いがけずも、神の救いの計画の全体像を、今この世でしっかりと目に納めることができました。このようにして、水や食べ物の枯渇に瀕(ひん)した荒れ野のただ中で、主なる神は、モーセの人生を満ち足りたものとなさいました。

讚美歌 310 番3節「ふるさとながめて のぼりゆく日まで」という歌詞の通り、モーセは神の栄光へと近づいていく幸いなるこの世の最期の時を過ごしたのです。これが、モーセ五書の最後に置かれた、ま

ことの希望であり、聖書通読する人がその個所で読み取り、感謝をもって受け取るべき希望です。

モーセの人生を顧みるならば、私たちはモーセと共に、次の点を「見抜く」ことが大切でしょう。神の御心が「全体」として、すなわち、完全に成し遂げられる、その裏返しには、私たちの人生は、必ずしも自分の思惑通りには行かないことがある、ということです。

申命記 3:23-26 モーセの願い——

23 わたしは、そのとき主に祈り求めた。24 「わが主なる神よ、あなたは僕であるわたしにあなたの大きいなること、力強い働きを示し始められました。あなたのように力ある業をなしうる神が、この天と地のどこにありましようか。25 どうか、わたしにも渡って行かせ、ヨルダン川の向こうの良い土地、美しい山、またレバノン山を見せてください。」

26 しかし主は、あなたたちのゆえにわたしに向かって憤り、祈りを聞こうとされなかった。主はわたしに言われた。「もうよい。この事を二度と口にしてはならない。27 ピスガの頂上に登り、東西南北を見渡すのだ。お前はこのヨルダン川を渡って行けないのだから、自分の目でよく見ておくがよい。28 ヨシュアを任務に就け、彼を力づけ、励ましなさい。彼はこの民の先頭に立って、お前が今見ている土地を、彼らに受け継がせるであろう。」

神は、モーセの最大の願いとも言えるヨルダン渡河(とか)の祈り求めを退けられました。こうして、出エジプト以来のモーセの宿願は叶(かな)わぬものとなりました。「渡って行けない」にもかかわらず、モーセが荒れ野で、つぶやくことの多いイスラエルの民を導き、前進して行く旅路は続いている……モーセにとって何とつらく、不条理なことでしょう。

かつてツインの荒れ野をさまよっていた時、モーセは、「あなたは杖を取り、…… 岩に向かって、水を出せと命じなさい」との主の命令を受けました(民数記 20:8)。ところが、「モーセが手を上げ、その杖で岩を二度打つと、水がほとばしり出た」(民数記 20:11)のです。

実際には岩を二度も打ってしまった。余計なことをしでかした。——これが、神の指示に厳密に従わなかった罪過として、神に記憶されました(参照: I コリント 10:5)。この「メリバ(争い)の水」と呼ばれる一件で、モーセのヨルダン渡河は水の泡となりました。

しかしながら、繰り返して言いますが、モーセは神の恵みによって満たされた人生を送りました。人生の最後においても、神の栄光に近づいていく喜びと、なつかしい国を目指して行く希望とにあふれていました。そこには、或る一つの(それが自分にとって重大なものだとしても)自分の願いが叶(かな)わなかったというような、自分の人生に対する未練がましさはなかったことでしょう。自分で達せられなかったことは、神が備えたもうた後継者・若者にゆだねました(申命記 34:9)。

ヘブライ人への手紙の著者は、「信仰によって」、モーセをはじめとする〈信仰者列伝〉を描き出しました。

〈信仰者列伝〉は、ある意味では中途半端な、つまり、そこに人間の〈断片性〉が露呈されているよう

な人生を送ったアベル、そしてエノクから始められています。

ヘブライ人への手紙 11:4——

信仰によって、アベルはカインより優れたいけにえを神に献げ、その信仰によって、正しい者であると証明されました。神が彼の献げ物を認められたからです。アベルは死にましたが、信仰によってまだ語っています。

最初の間、アダムとエバは、カインとアベルをもうけました。兄カインは土を耕す者となり、弟アベルは羊を飼う者となりました。そして、兄は弟を憎み、殺害しました(創世記 4:8)。

兄に襲われ殺されたアベルは、短命であり、この世的な意味では不幸な人生であったと言えるでしょう。しかし、「信仰によって」見ると、アベルは、神から祝福された人生を送った、と認められます。そして、「信仰によってまだ語っています」と言われている通り、今も私たちの間に、アベルは希望にうちに生き続けています。

ヘブライ人への手紙 11:5——

信仰によって、エノクは死を経験しないように、天に移されました。神が彼を移されたので、見えなくなったのです。移される前に、神に喜ばれていたことが証明されていたからです。

創世記には、彼の父イェレドや彼の息子メシェラが「そして死んだ」と記されているのに対し、エノクは「神と共に歩み、神が取られたのでいなくなった」と述べられています(創世記 5:18-27)。エノクの寿命は、父親や息子の半分以下でした。しかし、この世の人生の中途半端さによって、神に喜ばれたという喜びは、全く減ることはありません。

エノクの人生は、不可解な霧がかかっているようなものではなく、神と人々が喜び合っているところの明るさに満ちています。忽然(こつぜん)として家族の前から「見えなくなった」エノクですが、私たちは「信仰によって」、天に憩っているエノクを望み見ることができます。

私たちは気が付かないことが多いのですが、「神が私と共に歩んでくださった」という信仰による見方の大切さを、ヘブライ人への手紙の著者は私たちに教えています。人の寿命や病気あるいは人の罪性のもたらす(断片性)に覆われて、はかないかのように見える私たちの人生が、実は、永遠なる神の慈しみの中に置かれているのです。

ヘブライ人への手紙 11 章の〈信仰者列伝〉の初めに戻りましょう。そこには、私たちが注目すべき信仰の土台が記されています。

ヘブライ人への手紙 11:1-3——

1 信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。2 昔の人たちは、この信仰のゆえに神に認められました。

3 信仰によって、わたしたちは、この世界が神の言葉によって創造され、従って見えるものは、目に見えているものからできたのではないことが分かるのです。

正面切って、「信仰とは……確信し、……確認することです」と言われると、私たちは自分の主体性を省みて、自信が無くなるかもしれません。しかし、ここで第一に問われているのは、私たちの「主体性」や「自信」ではありません。

冒頭の文を訳し直すと、「信仰とは、望んでいる事柄を土台とする」あるいは「信仰とは、望んでいる事柄を本質とする」となります。「確信」は、元々「下に置く」という意味で、下に重心が置かれることにより安定する、ということです。

そして、この「土台」造り自体、私たちが考え、行うというものではありません。それは、次の文に、「この世界が神の言葉によって創造され、従って見えるものは、目に見えているものからできたのではない」と書いてある通りです。

天地創造の業は、父なる神と御子、イエス・キリストによって成し遂げられました(ヘブライ 1:2)。それ故に、私たちの信仰を基礎づけてくださったお方、主イエス・キリストは「信仰の創始者また完成者」(ヘブライ 12:2)と呼称されています。

もちろん、人間は誰も、天地創造に立ち会ってはいません。

ヨブ記 38:1-5 主なる神の言葉——

1 主は嵐の中からヨブに答えて仰せになった。

2 これは何者か。

知識もないのに、言葉を重ねて

神の経綸を暗くするとは。

3 男らしく、腰に帯をせよ。

わたしはお前に尋ねる、わたしに答えてみよ。

4 わたしが大地を据えたとき

お前はどこにいたのか。

知っていたというなら

理解していることを言ってみよ。

5 誰がその広がりを選んだかを知っているのか。

誰がその上に測り縄を張ったのか。

この創造主なる神の言葉によって、ヨブは悔い改めに導かれました(ヨブ記 42:6)。私たちの知らぬうちに、神から無償で、私たちの世界と人生に強固な土台が据えられました。私たちに求められているのは、そのことを聖霊の導きにより「確信」することです。

そうして、神の造られた、この展望台に私たちが立ったとき、「望んでいる事柄」、将来への望みが明らかになります。「望んでいる事柄」こそが、神の国に向かって前進する私たちの指針となるのです。

私たちの「主体性」や「自信」は、まことに心もとないものですが、「信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら」(ヘブライ 12:2)行けば、道を迷いません。

私たちは、目に見える事実、例えば、信仰者の善い行いや公(おおやけ)の祈りばかりではなく、「見えぬ事実」(ヘブライ 11:1 原語・複数形)、すなわち、隠された神の恵みに取り囲まれています。私たちが今、繰り返しそれらを「確認する」(＝確証を得させられる)こと、そのために聖霊に導かれて礼拝をささげることが大切です。

ヘブライ人への手紙 11:8——

信仰によって、アブラハムは、自分が財産として受け継ぐことになる土地に出て行くように召し出されると、これに服従し、行き先も知らずに出発したのです。

忍耐を要する信仰の旅路において、信仰の父(ローマ 4:16、ガラテヤ 3:7)、アブラハムは、私たちの模範です。天にいるアブラハムは、神に「召し出され」、人々が立ち上がって「服従する」ように、つまり、神の先導と私たちの応答が貫かれるように、その子孫を見守っています。

ヘブライ人への手紙 11:10——

アブラハムは、神が設計者であり建設者である堅固な土台を持つ都を待望していたからです。

ヘブライ人への手紙 11:16——

ところが実際は、彼らは更にまさった故郷、すなわち天の故郷を熱望していたのです。だから、神は彼らの神と呼ばれることを恥となさしません。神は、彼らのために都を準備されていたからです。

ここには、私たちが待ち望み、そこを目指して歩んでいる神の国には、「神の建てた都」があると証言されています。それは、神の国の土台あるいは中央の柱と言うべきものでしょうか。

私たちは、地上に主イエス・キリストが十字架につけられた都エルサレムのあることを思い起こしつつ、「生ける神の都、天のエルサレム」(ヘブライ 12:22)の到来を待望しています。

私たちの罪によりエルサレムの丘で十字架につけられ、復活させられ、昇天された主イエス・キリストが、永遠の都、「天のエルサレム」から再びこの地に来られる——信仰の先達と共に、私たちはこの再臨信仰を、この唯一の望みを懐(いだ)いています。

「信仰とは、神の都が開かれているのを見、それを希望して喜ぶことである。」

(A.シュラッター)

やがて、来るべき時に、主のとりなしと赦しによって、私たちは神の国の中心、神の都に召し集められます。私たちは、その時の、賛美と感謝にあふれる礼拝を待ち望んでいます。

ヘブライ人への手紙 11:13——

この人たちは皆、信仰を抱いて死にました。約束されたものを手に入れませんでした、はるかにそれを見て喜びの声をあげ、自分たちが地上ではよそ者であり、仮住まいの者であることを公に言い表したのです。

今しばらくの間、私たちは、信仰の父、アブラハムの「行き先も知らずに出発した」旅路を、また、受肉されたイエス・キリストの足跡をたどることになるでしょう。

アブラハムもまたイエスも、「人の子には枕する所もない」(マタイ 8:20)ような「よそ者」または「仮住まいの者」でしたが、この地にしっかりと足跡を残されました。

主イエス・キリストの誕生の地から、主イエスの主な遍歴を振り返ると——

ベツレヘム～エジプト～ナザレ～ガリラヤ～ティルスとシドン～エルサレム

エジプト及びティルスとシドンは、異邦人、すなわち、すべての隣人と主イエスがかかわりを持たれたことの象徴と言えるでしょう。

ただ「すべての土地」(申命記 34:1)を見渡すことしかできなかったモーセの望みを成就するかのように、主イエスは約束の土地、「すべての土地」を踏破されたのです。

主イエスは、大勢の人、すなわち、心貧しい人、病気の人、弟子となる人、そして律法学者や外国の為政者などと、繰り返し出会われました。主は彼らの苦しみや喜びを共有されました。主イエスご自身に罪を犯されませんでした(ヘブライ 7:26)、彼らの罪なる心の中へ入っていかれました。

私たちは、ヘブライ人への手紙 11 章の〈信仰者列伝〉を通じて、順調でなかった人、短命だった人(アベル、エノク)、希望を失いかけた人(アブラハム)、苦難の連続だった人(モーセ)、それから、特別に記憶されるような業績を残さなかった人など、さまざまなこの世の旅路・人生があることを知らされました。

彼らは、自分の信念や努力に依り頼むことなく、上より与えられた信仰を抱き続けました。

主イエス・キリストは、モーセの途中で止まった旅を引き継ぎ、目的地に到達されました。主イエスが、モーセの受けた神からの約束を成就してくださったのです。それによって、モーセが望み見ただけで、踏み入ることのできなかった約束の土地への道筋と生活が明らかにされました。

私たちは今、再臨の主イエス・キリストを待ち望みつつ、約束の土地のみならず、全世界が神の国の到来によって神に支配されることを祈り求めています。

この説教が行われた日(11月3日)、受洗された兄弟と共に、さらにまた、待降節の折(12月9日)、病床受洗された兄弟と共に、そして、その大きな慰めにあずかった教会の方々と一緒に、喜びのクリスマスを迎えられますことを心より感謝します。